

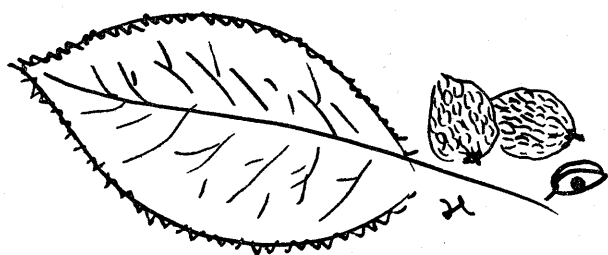
食べちゃった

文と絵

柴岡治子

小さな女の子がゴザをひきずって、桑畑を歩いていました。それはおばさんです。ゴザを引きずったのは、おばさんが小さかったからです。ゴザなんて言ってもみんな知らないでしょうね。タタミの表だけのものです。それを土の上にしてはおままごとをするのが、おばさんの小さい頃の遊びの一つでした。背のもっと高い子もいたのに、小さいおばさんはどうしてだか、いつでもゴザをひきずって一番後からついて行きました。

桑の木がおばさんよりずっと背が高く、桑の林の中を歩いているような気持ちでした。ところどころに赤い桑の実がついています。とてもきれいな色でした。よくじゅくしたのは濃い赤でつぶつぶがあり、毛がはえていました。みんなはそれを、とって食べました。指が赤く染まります。



お婆さんは食べようかどうかと、ちょっと困ったのを覚えています。お婆さんのお父さんはお医者さんで、洗わない果物、それも桑の実など食べてはいけないと言っていました。

お父さんの考えは、少し考えすぎのような気が、今のお婆さんにはしています。だけど、いけないと言われていたものが食べてみたいには困りました。

でもとうとう食べてしまいました。あまりきれいだし、どんな味かな。みんなおいしいおいしいと、指が赤くなっても平気であるのに。どうしても食べてみたかったです。

甘ずっぱいような味がしたような気がしますが、はっきりと覚えていません。

きっとお父さんの言うことを聞かなくて、悪いような気がしていたからでしょう。

でも食べてみてよかったなあとは今は思っています。